



東 訪 記

— 道路講習會に参加して —

渡 部 亮 一

一、講習會の記

五年振りに東京を訪れて、丸の内一帯のビル街と、それらを圍繞する夏木立から醸し出す帝都らしき威容と落着きに、今更らの如く感興を新たにしながら、めざす日比谷の市政講堂に着いたのは、七月三十日朝の七時半過ぎであつた。しばし公園のベンチに憩ひながら待つ程もなく、全國から馳せ集つた人達は、續々として會場に詰めかけた。茲で非常に愉快に感じたのは、土木協會のマークをつけた吾

等の會友が頗る多いことである。講堂入口の受付で、講習料と引換へに講習會員章を貰つて、出席簿に捺印すれば、それで最初の手續は済む。

出席簿を繰つて見ると内地は勿論、樺太、朝鮮、臺灣、關東廳などから参加された關係職員合計二一四名に及ぶ盛況振り。此の内、我が大阪府は一四名で數に於ては筆頭、神奈川県の一二名——内六名市職員——京都府の九名——内六名市職員——東京府の七名——内二名市職員、福岡縣

の六名——内一名市職員——内務省東京及横濱土木出張所の各八名などが優勢な分である。——之れを職氏名表に依つて見ると技術一五二名、事務五九名（不明三名）となるやうである。——

さて八時半より愈々一週間にわたる第八回道路講習會の幕は切つて落されたが、こゝにはその講習日程の表示は略す。

本講習の講師は人も知る斯界の權威者ばかり、その聲咳に接する機會を得たことは、吾等の喜びに堪えざるところである。その講義内容に就きこゝに詳記することは紙面が許す筈もなし、又その請け賣りはあまりに厚かまし過ぎるが故に之れを省略するが、唯參考までに概要だけを記述して見やうと思ふ

× × ×

青山技監、中川前技監、眞田、牧兩博士、田中土木事務官などの御列席の下に、橋本道路改良會副會長の開會の辭がすむと、先づ廣瀬土木局長の「土木行政」の講演が第一

陣だ。

土木行政の總論から始まつて、道路、軌道、河川、港灣等に就き、其の各々の法的解釋と、それらの一般情勢、並びに政府の既往及將來に對する政策に就き、明快に論述された。

次ぎは武井河川課長の「道路行政」の講演である。氏は最近まで道路課長の要職にあつて、我國路政の實質的當局者たりし方、隨てその講義振りは適切明快、さすがはと肯かせられるものがあつた。講演の概要は道路法適用上に於ける注意事項並に改正意見、例へば行政廳が認定せざる私道の取締を如何にすべきかとか、國道府縣道の認定標準等々十項自餘に亘り、頗る要領よく論及された。おそらく各地方事務職員は、本講習中に於て最も期待傾聽された講演であつたらう。

終りの野坂東大助教授の「土性論」は、從來土木施工とか、應用力學とか、或は又土壤學などに於て、その一端を私は嚙つたことはあるけれども、土木工學に於ける一分科

としての、系統的な講義を聴くのは始めてであつたが、土木學と相俟つて、この土性論即ち土の性質の學問は、土木工學に於ける基礎たる點に於て、今後益々深く研究されるであらう。講義は土性論の由來、土壤の成因、その化學成分、粒子組織、含水量、透水度、及び土の力學的性質と其の試験法等に就いて、相當詳細に講演されたが、僅か二時間ではそれを自分のものとするべく餘りに短時間過ぎる憾みがあつた。

第一日は之れで終る。私は同行のI氏と共に宿舎たる日本青年會館に引き上げた。この宿舎に就いては項を改めて述べやうと思ふ。

X X X

第二日は眞田博士の「道路施工」の講演から始まる。道路の設計並に施工上の注意事項とも云ふべきものであつて極めて平易なことでありながら、一般技術家が看過し易い事柄に就きて判り易く講演された。例へば道路の盛土をなす場合、一般に餘盛は一割を見積るのを普通とするが、軟

地盤の場合は一割三、四分乃至三割位を必要とすることがあるとか、舊道上に新道を増築堤する場合、その餘盛土量は、増築土量の外に舊道土量をも加へたるものの一割を見積るがよいとかなど、道路、橋梁、鋪裝等に關して三〇項餘に亘り詳述されたが、これらはすぐにも役に立つ實際的問題として、非常に有益な講義だと思つた。

次ぎは藤井博士の「道路材料」である。一寸地味なもののやうに思はれる「材料」に就き、興味を以て聽講させられる明快な講義振りは敬服の外はない。殊に世界各國に於ける道路鋪裝の特質、即ち各國が如何に國產材料を應用して、經濟的合理的工法をとりつゝあるかと云ふことを聽いて、吾々はやゝもすると劃一的、公式的に考へ易い鋪裝工法に就き、猶一層各地方に應じた有効適切なる工法を考究することが、道路技術家に與へられた重大な責務であることを痛感した。

石材の多い地方に於ける割栗石や、木材産地に於ける丸太片等を混凝土と併用する手段など、ヒントを與へられる

ことが多い。

ついで堀東京市技師の「簡易鋪裝」は、最近全盛の感ある本工法の、各國に於ける情勢、及びその構造、施工上並に維持上の注意事項、東京市に於ける施工狀況及び維持修繕費など、實地家としての蘊蓄を傾注された。

× × ×

第三日、三浦博士の「鋼橋」は、第六日の續講と共に橋梁技術の精粹、斯界の泰斗としての學殖を聽講することを得て、啓蒙さるゝこと多大である。

初めの日は主として橋梁設計上の示方に就き、即ち建設規定、荷重、設計等の詳細に互り講義され、後の日には電弧銲接に就き、分類、強度、腹板、設計例等各節に分つて詳論された。吾等に最も筆記ごたへのあるものであつて、それだけ又技術室のノートを豊富たらしめるものであつた。殊に電弧銲接は、銲結に取つて換はらんとする革命的新技術であつて、造船、軌道、橋梁其他あらゆる工學部門に採用されんとする氣運の澎湃たる折柄、この方面に全然無智

の私には、たとへその講義の全部が消化し得ぬまでも、電弧銲接とはどんなものかと云ふ概念を教示されただけでも、非常な收穫であつたと思ふ。

次ぎの大石内務技師の「混凝土工」は、混凝土用各種材料の性質並に施工上の注意事項等精細を極め、現場監督に當り、ともすると見逃がし易き事柄を指摘して詳述された。

此の講演を終ると實地見學である。

× × ×

見學先の概要説明を聞いたのち、午後二時頃より全員バス一五臺に分乗して出發、先づ荒川閘門邊りの内務省岩淵試験所を見學する。試験所に到着するや全員を五、六班に分ちて順次場内を案内して貰ふ。此所で誇るべきものは實驗水路で、幅四米、深さ一・八米、全長一六〇米の鐵筋混凝土造りで、規模の大きい點では世界的——現在世界第三位——なものだとの事、さらに之れに沿ふて幅員前者の半分位な、軌條設備のある水路があつて、水を靜止せしめて、進行する電車に取付けた流速計の檢定とか、流水の抵抗測

定などを行ふやうになつてゐる。之等二つの水路に於ける各種の水理現象の實驗は、引水に相當の時間と、費用を要するとかで見られなかつたのは遺憾である。その外土壓に依る擁壁の傾斜から起る内部地層變形の試驗——之れは各種岸壁、擁壁工に於ける控版の長さ及び位置等を決定する上に參考となると思ふ——とか、背水試驗、津浪の際に於ける津浪試驗、或は關門海峡に於ける潮流試驗——之れは海峡附近に於ける地勢及海底の起伏をそのまま模型に造り、一部締切の際に於ける潮流の變化を試驗する裝置、おそらく關門架橋計劃に資せらるゝものと思はれた——それから道路試驗機——同一中心の廻りを廻轉する八箇の車輪を備へ、荷重及び車輛の作用を實際に近い状態に置いて、各種舗裝路面の磨耗抵抗を試驗する裝置——等々有益な試驗設備が澤山あつたが、後部の班に加はつて見學した私は、三〇分の豫定時間では半分程の素通りで辭去するの止むなきに至つたのは残念千萬であつた。

此所から引返へして九號國道の新裝道路二〇号を快速度

で突走り、改良工事終點たる埼玉縣大宮町に着くと、此所では目下盛んに内務省東京土木出張所の所で工事が進められつゝある、一同下車、先づ見せられたのは舗裝面の凹凸を測定するバムポメーターと云ふ器械である。約三米の長さの枠で、兩方に車輪があつて、中央に高低を検する針が路面に接してゐる、そうしてこの器械を曳引して、一定寸法以上の凹凸があると、ベルが鳴ると共に赤白二様の豆電球が灯るやうになつてゐる。此處では凹凸の制限を六耗としてあるさうだが、特種器械を使用して施工されてゐるため接手以外には、此の制限範圍を超ゆる所は、此の附近にはないとの事。

次ぎには舗裝を丸く刮り抜いて検査するコアドリルがあるが、一部損傷のため使用實況は見られなかつたが、双先きのある圓筒の廻轉に依つて路面を切り下げ刮り抜く器械で、種々な試験片が其處に列べられてゐた。この器械を用ふれば、隨所に舗裝の厚さや施工の精粗等を検査することが出来るから、請負工事などの検査には持つて來いであら

う。之等の器械使用は内務省なればこそと思つた。

それからロード・フイニツシャーに依る混凝土鋪裝の實況や、道路工専用材料即ち歩道用ブロック、カーブストーン、集水柵蓋等の製作狀況、並にデョイント用アスファルト延板の見本及製法説明等を見聞して、教へらるゝ所が多かつた。百聞は一見に如かずと云ふ言葉を切實に感じた。

此處の見學を終へて再びバスに乗り、新裝成れる大宮公園に至つて、埼玉縣よりの茶菓の饗應に預り、おみやげを頂き、記念撮影をして此所を辭し、日暮れの街路を疾驅して、やがて我が宿に歸つたのは晩の八時近い頃であつた。

× × ×

第四日は「高級鋪裝」に就き牧野内務技師の講演から始まる。鋪裝の重要性に就いて、殊に運輸經濟の見地より、鋪裝によりて受くる利益の如何に莫大であるかを數字的に論證し、而して鋪裝の選擇及び種類に就いて詳述され、終りに、我國に於ては高級鋪裝を是非必要とするところは極めて僅少であつて、大部分は中級鋪裝及簡易鋪裝を以て足

るから、之等に就き充分研究し、普及發達を圖るべきであると結ばれた。

次ぎは大河戸東大教授の、鐵筋混凝土橋である。かつて——大正一四年？——土木學會誌に發表された論文の、公式、理論等の敷衍説明のやうに承はつたが、拱軸線の定め方など、淺學な私には仲々むづかしい理論であつて、それを呑み込むべく、之れ亦あまりに時間が少ないと思つた。

ついで拱橋施工上の注意事項としてセンターリングは絶対に下らず狂はぬやうにすべきだとか、混凝土打ち及び埋土は對稱的に施工すべきだとか云つたやうな比較的判り易い講義のあと、かつて鐵道省御在職中に於ける、技術以外の用地買収、立退などに困らされた體験談を試みられた。そこに教授と技師、即ち學匠と實際家と云ふ二つの立場を、私は興味あるものと思つた。

× × ×

第五日即ち八月三日は、かねて吾等の期待した新宿御苑拜觀の日である。午前九時頃御苑裏御門より參入して、休

憩所に於て全員の揃ふのを待ち、愈々拜觀の光榮に浴した。

御苑は人も知る通り、春秋二季に於て、兩陛下行幸啓の下に觀櫻、觀菊の御會を御催し遊ばされ、文武百官をお召しに相成る光榮の園である。係官の案内に依り御苑内を拜觀したが、その結構は壯麗と云はうか、幽邃と云はうか、大都會の中に之れだけの廣大な園生がある事が不思議とさへ思はれる。廣袤實に一八五、〇〇〇坪、緑の毛氈を敷き詰めたやうな廣々とした芝生の原野、林泉布石の妙を盡した日本庭園、自然的な綠樹と花卉配置の巧を極めた洋式庭園、四圍の鬱蒼たる木立、そして所々に構へられたる閑雅な御殿、水亭等々、すべては庭園美の極致である。若し吾等拜觀者一行の靴音を消すならば、身は恰も天境を逍遙するの思ひあらしめるであらう。

この名苑拜觀の機を恵まれたる今日の慶びに感激し乍ら、退出したのは午前一時頃であつた。

× × ×

午後は「交通整理」に就いて、斯學の權威者たる佐藤内

紹介

務技師の講演である。近時交通は愈々繁激快速化するに及んで、之れが整理、調節は殊に都市に於ける大きな悩みであるが、陸上交通の主體たる道路と、交通機關とは密接不可分な關係にあるから、道路技術者は先づこの交通といふことを念頭に置いて、適切なる對策施設を考慮すべきことは云ふまでもないことで、此の方面の研究は益々旺んに行はれねばならぬ。その意味に於て本講演は頗る有益、貴重なものであつて、交通事故交通整理の歴史、交通整理方式、一般交通管制、道路構造及施設、鐵道踏切、交通標識等の各節に亘り、該博なる知識を發表され多大の收穫を得た。

× × ×

第六日は、始め田中土木事務官の「道路工事執行令の改正」と題し、十數項に及ぶ改正要旨の説明があり、先きの「道路行政」と共に事務職員諸君の最も待望されたところ、路政當局の講演として、其の意見は感銘すべきものがあった。

一〇九

次ぎは前記三浦博士の「鋼橋」の續講終つて「滿洲新事情」に就き山田陸軍中將の科外講演があり、新興滿洲國に於ける主として交通情勢に就き、熱辯を振はれた。

之れを終ると、第二回目の實地見學として、東京市のアスファルト工場視察に出掛けた。此所では瀝青乳劑の、製造工程を見せられた。原料アスファルトを熔解して、一方工業用石鹼、硫酸ソーダ、澱粉、水等より成る乳化液と混和して、瀝青乳劑が出来上り、之れが樽詰となるまでの諸工程が、一目瞭然として判る。然しその分量とか熱度、時間等實際に當つては、擔當技術者の苦心研鑽を要するものが多いであらう。

此所を出て、近くの道路に於ける混合式瀝青乳劑鋪裝の實況を見學した。此處でも亦「百聞は一見に如かず」を痛感した。各種のパンフレットや、おみやげを戴き、茶菓の御馳走になつて、三々五々歸路に就いた。

× × ×

翌くれば八月五日即ち本講習最後の一日である。初め、

「道路維持」に就いて、岩崎長野縣土木部長の講演があつた。我國の道路状態を見るに、各種の鋪裝道路は實に僅少であつて、その大部分は砂利道であるが故に、此の砂利道を如何に維持すれば、この繁激な交通量に堪え得るか、當面の重大問題である、と云ふ冒頭の下に、修繕作業方法と其の注意、修繕用材料及勞力、道路面の管理、道路工夫の指導監督及優遇方法、參考資料等の各章に亘り、多年研究の結果を精細發表されたが、その基礎的調査の用意周到なのに一驚すると共に、かねての定評を裏書きされたことを非常に愉快に思つた。私はかつて昭和四年二月、同部長の前任地茨城縣に管外出張をなし、水戸から鹿島神宮までを縣廳の自動車に便乘させて戴いて、路面修理の行き届いて居ること、交通標識設置の多いことなどに感心したが、今この講演を聞いて成る程と肯かせられた。

一道三府四十三縣に亘る道路修繕費比較調——國府縣道延長、道路修繕費、工夫數、工夫給、一籽當修繕費、工夫一人當擔當延長等表示——或は自動車其の他諸車臺數及稅

額比較表とか、又維持修繕方法適否に依る影響調査、及び舗装道と砂利道との比較等々の参考資料には全く敬服の外はない。

之れだけの準備劃策の下にある道路が、良くなるのは何等不思議はないと思ふ。

ついで「丹那隧道工事」に就き平山鐵道技師の講演があつた。かつて「丹那トンネルの話」といふ本を讀んだ私には、大變興味を覺えた。難工事たる點に於て、世界的に有名となつた同トンネルの概況講話の後、映畫及び幻燈に依る説明があつた。

次ぎは青山技監の「道路の第一義に就いて」と題する講演である。道路の歴史、道路の構造分類、道路の意義等に就き論及された。吾國土木技術官の首位にある方の聲咳に接することを得たのは、吾々の非常な欣びとするところであるが、殊にオープン、シャワを着られた、一見無頓着のやうで、デモクテイックな感じのする御風采に接して、私はそこに大變親しむべき技監を仰ぎ得たことを嬉しく思つ

た。

最後に佐藤鐵道技師の「歐米新事情」主として倫敦に於ける交通情勢の講話は、興味あるものであつた。

これを以て道路講習の全課程を終る。

青山技監、牧、眞田兩博士等御列席の上、終了式が舉行され、中川吉造(理事)より終了證書は講習員總代に授與され、答辭を以て式は閉ぢられた。それより記念撮影をなし、深川の清澄公園に於て謝恩會を催し、歡談裡に解散した。

私はこゝに、酷暑の折柄、幾多有益なる御垂教を仰いだ各講師の方々、並びに道路改良會の方々に深く感謝の微意を捧げると共に、講習參加の方達の御健在を祈つて、この項を終る。

二、日本青年館のことも

東京へ行つて何處で泊らうかと考へたときに、ふと思ひついたのは、かつて話で聞いたことのある日本青年館のこ

とであつた。そこで物は試しだ一度行つて見やうと考へて東京に着いた日に電話で聞き合して見ると、泊めると云ふことである。一人ではつまらぬから同行のI氏を誘ふて、第一日の講義が終ると早速出掛けて見た。場所は神宮外苑の横で比較的閑靜な所にある。

玄關の受付で手續きをして一週間分の宿泊料七圓——食事は別——を支拂ふと部屋へ案内して呉れた。部屋は洋室で中央にテーブルと椅子が併べられ、兩側にベッドが併んで——一室八人分——一つ一つが衝立で仕切られて、入口はカーテンを引くやうになつてゐる。

館内の設備としては浴場二つ、食堂二つ、賣店、新聞閱覽室、休憩室、理髮室、寫眞室等がある。

茲で私は一寸此の日本青年館の生ひ立ちを、聞き傳へに紹介して見やう。

大正九年十一月、皇太子殿下から全國青年團員に對して特に優渥なる令旨を賜つた、その光榮に對する感激の結晶が全國青年團員の躰金となり、大正十年九月皇太子殿下御

外遊御歸還を期して財團法人日本青年館の設立を見たのである。大正十一年十二月に地鎮祭が行はれ、十四年十月二十六日から開館されたもので、近世式鐵筋コンクリート五階建、延坪二九八二坪、此の建築費百六十二萬圓を要したと云ふ。此の中に上記の宿泊部が設けられ、青年團員の宿泊を本體として軍人、教育、社會事業各關係者其他を宿泊せしめつゝある。

現在どれ位の宿泊者があるかと尋ねて見ると三百五十人餘だといふ話である。——入營時期など千五百人位あるとか——女性も相當多く三割位は占めてゐると思はれた。見たところ矢張り講習會にでも出席の方、地方の學校の先生方と武道試合に上京した學生諸君と云つた様な人達が多い。食事は粗末だが、安いからあまり不服は云へぬ。私達は朝食だけはこゝで食べて、晝は勿論、晩も大抵外ですませた。

兎に角、此所の特徴は氣らくなことである。チップや茶代の心配もいらなければ、同宿の客への見榮もいらぬ。夜

は十時になれば消燈されるから、他人の騒々しさに睡眠を妨げられることもない。一切が無差別、平等で、氣障な人間が居らず、一種獨特な自治的、修養的な、なごやかな空氣が流れてゐることは氣持ちよい。

一日も餘計な休みもない講習期間中に、出来るだけ多く東京を見聞したいと思つた私は、時間が終るとすぐ銀座方面の鋪道やデパートをぶらついて見たり、淺草の笑劇や映画をのぞいたり、時には友達を訪ねたりするには、矢張り普通の旅館よりは此の方が——サービスと御馳走を期待せざる限り——割安で得策であつたと思ふ。

敢へて此所をお奨めするのではないが、東京訪問記の一節として、こゝに一寸書いて見たのである。

三、東京と大阪

僅か一週間で、正確に現在の東京を認識し得る筈もないが、その間に私の感じたこと一つ二つを記して見やう。

一番痛感したのはタクシーの安いことである。大阪は近

頃メーター制になつて、極く近い距離はともかく相當距離はべら棒に高くて、吾々プロ階級には一寸馬鹿らしくて乗れなくなつた。遠距離になるとおそろく東京の三倍もとられる。自動車が大衆の足となりつゝある今日、これはたしかに時代逆行である。それだけ東京の運ちゃんは大阪を羨やむかも知れないし、大阪の乗客は東京を羨望すること甚だしい。それに次いで今更らの如く感ずることは、東京市内に土地の起伏と綠樹が多く、平面的な街衢を見馴れた大阪人には、東京の街の姿は變化があつて好ましい。

適當な住居地域が大阪市内に少ないのも、多少はこんな事が關聯してゐる。坂路がなくて喜ぶのは自轉車乗りの丁稚小僧君だ。それで大阪に商賣道が榮えたといふ譯でもあるまいけれど。

土地として東京人が最も誇つてゐるもの、それは云ふまでもなく、畏れ多くも皇居の地であること。あのお濠をめぐらした千代田城の翠綠こそは、日本國民のひとしく仰ぐ聖域、東京人の唯一最高の衿持たることは言をまたぬ。東

京人が首都として、政治教育の中心地としての誇りを持つに對し、大阪人は商工業の中心地を以て自負する。素因的に、機能的に、其處に二つの異なつたタイプの都市が存在するのは當然で、前者がお上品で、後者が平民的であると云つても、敢へて異とするに足らぬ。

斯う考へて來るに付けて感ずるのは、夏の大阪に洪水のやうにはやつて來るホームドレス——俗名アツパツパ——姿の女性が、東京ではあまり見當らぬことである。こんな所にも貴族的——少し語弊があるかも知れぬが——と平民的との相違の片鱗がうかがはれる。

尤も女性の服裝、といつても柄だけは大阪の方がたしかに派手であると思ふ。道行く娘さんの着物を見て、東京はたしかに地味だと思つた。よく云へば理智的かも知れない。

そして洋装の着こなしは、東京の女性がずつとうまいと思ふ。平民的だと云ふ大阪で、タクシーが高いなどはロジックが合はな過ぎるが、まあそれは土地の氣風的な相違をたとへたまでである。

そのほか料理だとか、言葉だとか、兩都の種々相を比較觀察するものは多々あるが、今日は之れ位にして置いて、次の如き結論を以て駄稿を終らう。

一月ばかりもかゝつて、道々話の種を拾つて歩るいた東海道五十三次も、今ちや二時間餘のうちに飛つ走る現代だ。昔考へた距離の觀念は極度に壓縮された。地球の隅々まですべて有無相通する。風俗も、生活も、思想も、その他あらゆるものは國境を越えて相交錯する。アフリカの土人が日本製の布を纏ふたところで、銀座の鋪道を濶歩する麗人の首に、北歐のシルバーフォックスがのさばつたつて、何等の變哲もない。況んや同じ國境内に於て、東京がどうの大阪がどうのと較べて見るのも時間の問題で、やがては融通し統合されて、その特異性をさがすのに骨折る時が、あまり遠からざる時期に來るのぢやないか知ら。

大阪のアツパツパが——眞に利便で普及性のあるものなれば——東京にもこれからどしどし浸潤するだらうし、又

× × ×

東京の女性のドレスの着こなしが、やがて大阪の娘さんをも見直させるに違ひない。

文明の波及性、人間生活の國際化は、如何なる手段を以ても阻止し得ぬ。

× × ×

穴埋子の「おもしろい府縣名」から取り残された
難物をどりやこちつけて……

野狐禪生

馬券で儲けて北海道
可笑しな事など岩手縣
このマア絶景宮城縣
紺の暖簾に山形縣
女もこのごろ福島縣
冷害食料栃木縣
大演習では群馬縣
そろ／＼お山もお千葉縣
あゝいや斯う言ふ富山縣
潤れた流れも石川縣
あつても矛盾な山梨縣
据えたおみこし長野縣

冗長な駄文を以て、貴重な紙面をふさいだことをお詫びして、ペンを擱きます。——(昭和九年九月八日)——

(本誌編輯部に於ては最近此稿を入手したるが譯習員としての忠實なる精神が文面に躍如として居る、一讀快心を感じるので聊か六萬十菊の憾なきにあらねど本誌に登載する次第である。)

おかゝに胸倉ぎふ岐阜縣
お年の割にはお若く三重縣
何處まで強いよお滋賀縣
埒ちもないことあら京都府
いきなあたまの兵庫縣
月給前ぢやアまゝに奈良縣
燃え立つ錦の岡山縣
寝足でへたばる山口縣
御馳走酒には愛媛縣
颯風あつちも高知縣
下郎は今でも口佐賀縣
お色が眞ッ黒熊本縣
資格ぢや寺より宮崎縣
ハイキング登山ぢや鹿児島縣
つまらぬ洒落など沖繩縣